

2025年12月7日 礼拝説教要旨
 ヨハネによる福音書講解説教63 「命へ呼び覚ます主」
 イザヤ25：7～8、ヨハネ11：38～44

イエスさまは「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれます。もちろん、これはイエスさまがラザロを墓の中から呼び出された出来事ですが、同時にわたしたちの救いの出来事でもあることを忘れてはなりません。わたしたちは、罪ゆえに神の国と神の義という本来の生きるべき命に生きておりません。それはまさに生ける屍であり、墓の中に閉じ込められた状態です。けれどもイエスさまがそこからわたしたちを本来の命へと呼び覚まされます。イエスさまの救いはそこを目指しています。死んだ人間がどうして生き返るのか。果たして蘇生は可能なのか。聖書はそういうレベルの話をしているではありません。もっと根源的な問題です。それは神の国、神の義を生きる命であり、それが他でもないよみがえりの命です。

何よりイエスさまはここで怒っておられます。これは非常に激しい心の動きを示す言葉です。馬が鼻を鳴らす、鼻息を荒くして馬がいななく。わたしたちは鼻息を荒くするほど怒るということがあるでしょうか。あまりそういう感情を表に出すのはみっともないと考えるかもしれません。どこか冷めた目で見ている、人ごとにしていることがある。あるいはあんまり怒ると血圧が上がるから、もっと穏やかに、無理をしてでも平静さを保つようにしている。しかしそういう中でわたしたちは怒りを忘れ、どこか真剣さを失っているのではないか。世の中を見れば怒って当然のようなことばかりです。でもわたしたちはいつのまにかその怒りを置き去りにしています。それは何か諦めのような、無力感のようなものにも思います。けれどもイエスさまは怒っておられる。それはイエスさまの真剣さであり、ラザロの出来事をご自身のこととして受け止めておられるということです。

イエスさまは何に対して怒っておられるのでしょうか。それはラザロを家族から引き離し、ラザロを死の闇の中に閉じ込めてしまう恐ろしい罪の支配です。このイエスさまの怒りを思う時に、『ハイデルベルク信仰問答』の言葉が頭に浮かんできました。人間の罪について教えるところに次のようにあります。「神はそのような不従順と背反とを罰せずに見逃されるのですか。断じてそうではありません。それどころか、神は生まれながらの罪についても、実際に犯した罪についても、激しく怒っておられ、それらをただしい裁きによってこの世においても永遠にわたっても罰したもうのです」(問10) 神さまが罪に対して激しく怒っておられる。何よりイエスさまの怒りはこの罪に対する怒りと理解してよいでしょう。

それこそわたしたちはこの罪に対しての怒りを忘れているでしょう。罪に対してあまりにも鈍感なのです。自分がどのような神さまの怒りをかかっていることすら忘れているのです。それよりも自分は今日も正しく生きてきた。良心の咎めを感じないまま、悔い改めもないまま、ただ何となく一日を過ごしているのではないでしょうか。そこにわたしたちの甘さがあります。わたしたちは日々、その罪の負債を増し加えています。それゆえ神さまの怒りは日々増し加えられているのです。それにも関わらず、わたしたちはその罪に対して、真剣さを失い、ただ諦めと惰性の中に安穏としているのです。それはまるで墓の中に閉じ込められているような状態ではないでしょうか。

イエスさまはここで「その石を取りのけなさい」(39節)と言われます。それはこの罪と死の

中にわたしたちを閉じ込めている石を取りのけなさいということです。この「石」は象徴的な意味もありますが、わたしたちを罪と死の中に閉じ込めているあらゆるものをそこで考えることができるとおもいます。イギリスの牧師でスポルジョンという人は、この石を「無知」「誤解」「偏見」「孤独」「墮落」「絶望」と表現しています。確かにそういうものが重石になってわたしたちはなかなか自由になることができません。罪と死の問題に対してあまりにわたしたちは無知です。アダムの物語を単におとぎ話のようにしか考えていません。それゆえ罪に対する真剣さを失っています。またわたくしはそこに「諦め」や「無気力」「無力感」も加えたいと思います。「どうせ罪人だ」と言います。最初から諦めてしまっています。また死に直面する時に、わたしたちは死の力に圧倒され、もはや諦めしかないのではないか。あまりに無力であり、泣き崩れるしかない。また「恐れ」もあるでしょう。死の前に誰もが恐れ、うろたえます。愛する者の身体が腐敗し、死臭を放つことが耐えられない。その朽ちていく様にわたしたちは恐れを抱くのです。

これまで、わたしは牧師として何人もの方々の葬りに立ち会ってきました。以前は数えていましたが、今はもう数えることもできなくなりました。ある教員の方が亡くなられた時に、連絡を受けてすぐ病院を訪ねました。処置が終わり、葬儀社の車が到着して、その遺体を乗せるところに、担当された医師や看護士の方々が見送りにこられたことがあります。わたしが教会の牧師であるとわかって、その場にいた医師が「あとはよろしくお願ひします」と深々と頭を下げられたことがあります。何気ないやり取りですが、その時に思ったのです。人間ができるのはここまでなんだ。ここから先は信仰しかないのだ。信仰だけが救いなのだ、と。

そしてその信仰を可能にしてくださるのがイエスさまなのです。イエスさまだけが毅然とこの死に立ち向かっておられる。怒りを持ってこの罪と死に対峙されるお方がおられる。それがわたしたちの慰めです。そしてイエスさまによってその石は取りのけられ、わたしたちはそこから解き放たれるのです。「ラザロ、出て来なさい」原文を見るともっと強い口調で言われたと思います。「ラザロ、外に出て来い！」そこはお前がいるところではない。早く、出て来い。わたしのところに来なさい。わたしにお前が生きる本当の命がある。神の国がある。罪赦されて神さまに義とされる喜び、平和がある。

クリスマスが近づいて来ます。神さまはイエスさまをこの罪と死の世界にお遣わしになられました。そして人間の罪の苦しみ、死の苦しみをすべてその身に担われました。ラザロを墓の中から、罪と死の中から呼び出された主は、ただそこに留まらず、自らも墓の中に踏み込まれた。十字架で死んで墓に葬られたのです。そして三日目によみがえられました。そこからわたしたちを本来の生きるべき命へと連れ戻すためです。ラザロのよみがえりはその先取りでしょう。そしてわたしたちもまたラザロに続くのです。

天の父よ。罪と死の中に閉じ込められているわたしたちです。それが当たり前のようになり、怒りすら覚えることもなく、ただ諦めることしかできないわたしたちのところにあなたはイエスさまをくださいました。そしてこの墓の中からご自身の命の中へ、本来生きるべき神の国へわたしたちを呼び覚ましてくださいます。それゆえにどうぞ罪と死に毅然と立ち向かう勇気と力を与えてください。主の御名によって祈ります。アーメン。